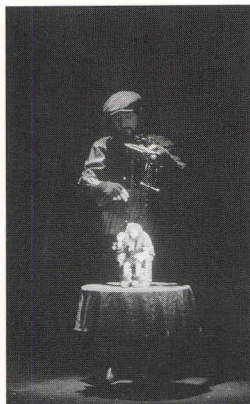


DOLL FORUM JAPAN



DOLL FORUM JAPAN
ドール・フォーラム・ジャパン
FEBRUARY 1996 Vol.8

人形制作 大井要



ヨシヤ・ヤマモト

グループ「生き粋会」 展覧会

5/29~6/3 (予定につき、
要確認) 10:30~20:00
(木・金・土)、~19:30
(日・月・水)、最終日17時
銀座松屋 8階大催事場
東京都中央区銀座3-6-1
tel 03-3567-1211

人形では抱き人形の長谷川
裕子さん、市松人形の藤村
明光さんが出展、現代の若
手職人の勉強会 による初め
ての展覧会。

◆人形展 三人のおもちゃ箱

(石橋まり子・山本純子・波田亮)

3/20~3/25 銀座柴山画廊

東京都中央区銀座5-8-3 柴山銀座ビル2F

☎03-3572-1389 連絡先 エコール・ド・シモン (p22
教室案内参照)

◆中西京子とやまと鳳和紙人形展 3/25~31

横浜人形の家 企画展示室

神奈川県横浜市中区山下町18 ☎045-671-9361

◆くら田たまえ人形展 金太郎元気! 桃太郎勇気!

4/16~4/30 銀座松屋 遊びのギャラリー

東京都中央区銀座3-6-1 ☎03-3567-1211

* 総野美代子も同ギャラリーで9/24-10/7 個展を予定

◆島村龍児個展 (写真) 4/2~4/7

11:00~18:00

(最終日17時)

すべ〜す小倉屋

東京・JR日暮里駅北

口左出口 (朝倉彫塑

館より200m先) ☎

03-3828-0562

* お倉のあるギャラ

リーで新作を含めた

人形20数点とフォ

ト絵 (写真を版画氏

や和紙に焼き付け彩

色) 10数点の作品展



◆藤井路以教室展

5/12~5/18

ギャラリーオガタ

東京都中央区銀座6-7-12 (横山町ビル1F)

☎03-3571-1429

連絡先: 藤井路以アトリエ (p22 教室案内参照)

DOLL FORUM JAPAN

FEBRUARY 1996 VOL.8

CONTENTS

表紙 「封印の鏡」より 人形制作 大井要

インフォメーション・スケジュール 2・3
近況報告 吉田良一 4

Review 展覧会より 5~8

福田朝子・高木治美・大井要・古田文・戸田和子
熊倉聖祥・小沢幹子・高橋節子・吉田良一
四谷シモン・たがわまさき・サラデモーラ
稲片智津子教室展・中西京子教室展
創作人形協会展・プランタン人形展

人形気分 「手前味噌」 文 青山恵一 9

カバーインタビュー 大井要 10~13
聞き手・文 小川千恵子

ゲイルからの手紙「私のメガネで見るあなた」 14
文 ゲイル・エニド・ジマー

ピンスポット 「ギャラリーアメリカ」 15
トピックス - 足柄SA人形展 15

人形つれづれ 第8回 文 福島弘太郎 16
グローバルドールソサエティ
コンベンションレポート 17

お化け屋敷店長日記 第4回 神様のルール 18
文・イラスト 摩宮ピノン

「白石人形の蔵」イラスト 渋谷真理子 19

DFJ活動報告 サーニット講習会 19

ニュース 19

近況報告 山下治子 20

from overseas ジェイン・デイヴィス 21

教室案内 22

投稿・編集後記 23

ドール・フォーラム・ジャパン 8号

1996年2月24日発行

ドール・フォーラム・ジャパン事務局発行

ドール・フォーラム・ジャパンは日本のアーティストドールを
支援するためにつくられた情報誌「ドール・フォーラム・ジャパ
ン」の購読会員による非営利の組織で、購読会費とユーラシア・
ドールズのスポンサーシップにより運営されています。
* 営利目的のお問合せには応じませんのでご了承下さい。

SCHEDULE & INFORMATION

■インフォメーション

◆意欲ある作家の入会を募る！ 天愈会

美術人形天愈会は創作の主義・主張を大切に各自の個性を尊重し、美術人形とはを問い追求する作家集団です。会員作品による定期的な展覧会を中心に活動を行っています。詳細は下記にお問い合わせ下さい 美術人形天愈会（事務局 関口敬二）
TEL 0485-41-1451

〒362 埼玉県鴻巣市人形1-4-21（吉見屋内）

現代有名人気人形作家約200名収録

◆-GRAPHIC- クラフトアート人形篇

今日の人形界を多面的にとらえた現代人形作家の名鑑が4月初旬に全国書店で一斉発売される。誌面では作家自選の近作、作者写真、略歴、コメントを一人1頁オールカラーで紹介。

A4判300頁、定価7800円 予約注文は：

株式会社マリア書房 〒602 京都市上京区室町通下立売上ル
TEL075-432-1201 FAX075-441-2923

◆空間の散歩 ヨシヤ・ヤマモトの人形劇

3月29日～31日（開演時間 29日：19時、30日：14時&19時、31日：13時&17時）前売3000円 当日2700円（全席自由） -ヨシヤ・ヤマモトのつくりだす世界には、ドラマチックなストーリーも、派手な装置も必要とされない。人形は、台詞をしゃべることもなければ、表情を作ることもない。出来ないのではなく、その必要がないのだ。その繊細で華麗な動きによってすべてを語り、すべての表現が出来るのはヨシヤ・ヤマモトの人形が世界でも類をみないオリジナリティーをもっているからだ・・・（前回公演パンフレットより）

フジタヴァンテ ヴァンテホール 渋谷区千駄ヶ谷4-6-15
フジタ本社ビル2F 03-3796-2486

問い合わせ：ネルケプランニング 03-3379-7151

■展覧会・個展他

ドールフェア 3/3迄

グランパバ青山本店

東京都港区南青山1-1-1 ☎03-3475-1388

11:00～19:00

ヒムスタッドをはじめとする欧米の一体物・限定品のアーティストドール、国内作家では長谷川裕子、三輪輝子、榎田静子、小林美枝子ら七人の作家が参加、お店に人形が一杯のドールフェアは雛祭りまで開催

「ひとがた・カラクリ・ロボット」展 3/3迄

0美術館

東京都品川区大崎1-6-2 ☎03-3495-4040

10:00～18:30（入館18時まで）休館木曜日

入館料 大人500円

〈生き人形から「芸術」へ〉〈マネキンにおける人体表現の展開〉〈からくりからロボットへ〉〈現代の「ひとがた」〉をテーマに松本喜三郎、山本福松、ベルナルド・フォコン旧蔵のフランス製マネキン、萬屋仁兵衛、ナム・ジュン・パイク、四谷シモン、森村泰昌などの作品を展示、ひとがたにまつわる本質的な創造欲について考察する

アートギャラリーせ・らへる

東京都渋谷区千駄ヶ谷3-52-3 黒川ビル3F

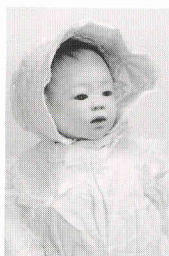
☎03-3478-5230 正午～20:00 無休

●3/17～24 渡辺萌 人形個展（写真）

●吉田良一人形教室展 前期4/2～4/8

後期4/9～15

●4/23～4/29 浪漫亭きもの市（人形のための友禅、ちりめん、時代布など）



●5/13～19 第3回グループ

ロンド創作人形展（写真）

日本創作人形学院（金曜クラ

ス）粘土人形科の卒業生9人が

参加



●5/21～30 味岡延博 市松人形展

（写真右）

*この他、2/23～3/2の豊浦正明写真展にて山吉由利子の人形展示の予定あり。



昔人形館青山 K1 ギャラリー

京都府京都市北区北大路室町南入ル小山東大野町69番地

☎075-415-1477 13:00～19:00

アピールボックス

●2/1～4/30

山口景子・菊池さなえ・大槻和子

●5/1～7/31

柴倉一二三、後藤久子、太山レミ

*6号誌上にて11/1～96.1/31のアピールボックス出品者として楠田アヤ子、山吉由利子、岡馬 勲の各氏をご紹介いたしました。これは間違いでありここに訂正し皆様にご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。（編集部）

人形ブティック竹取物語 かぐや姫の会

東京都豊島区目白3-17-27 ☎03-3954-3395 12:30～18:30

*かぐや姫の会は人形ブティック竹取物語の作家達による作品展の名称です

●3/12～16 平成の文化人形展

●3/26～30 たんぽぽ展（たんぽぽ

をテーマにした人形や小物）●4/23

～27（予定）小林美枝子人形展



エコール・ド・シモン人形展

（写真右）3/7～3/12

新宿 紀伊国屋画廊

東京都新宿区3-17-7

☎03-3354-7401 10:00～18:30

（最終18:00まで）

連絡先 エコール・ド・シモン（p22
教室案内参照）



昨年12月の個展出品作品より

吉田良一

先頃急遽来日した現代人形収集家でもある映画女優のデミ・ムーアは、吉田氏をはじめとする数人の若手人形作家と面会、吉田氏の解体された人形の美しさにひかれ、2年後に開館予定の人形美術館に氏のイメージを尊重したの展示箇所を設けることを約束した。

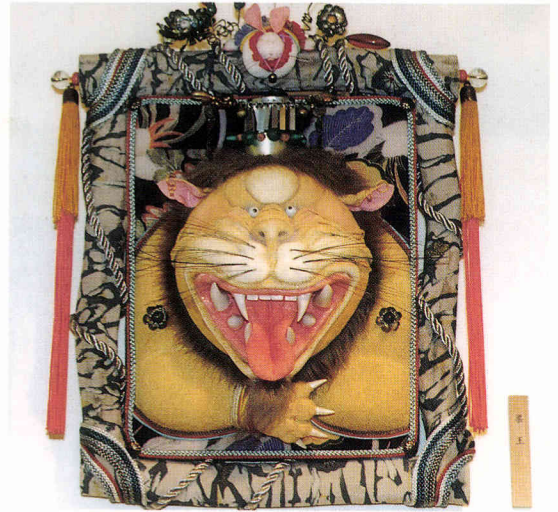
写真集「アナトミックドールⅡ」も12月に発行され、3月には「アナトミックドールⅠ、Ⅱ」を合わせたCD-ROMが発売になる予定。

REVIEW

展覧会より



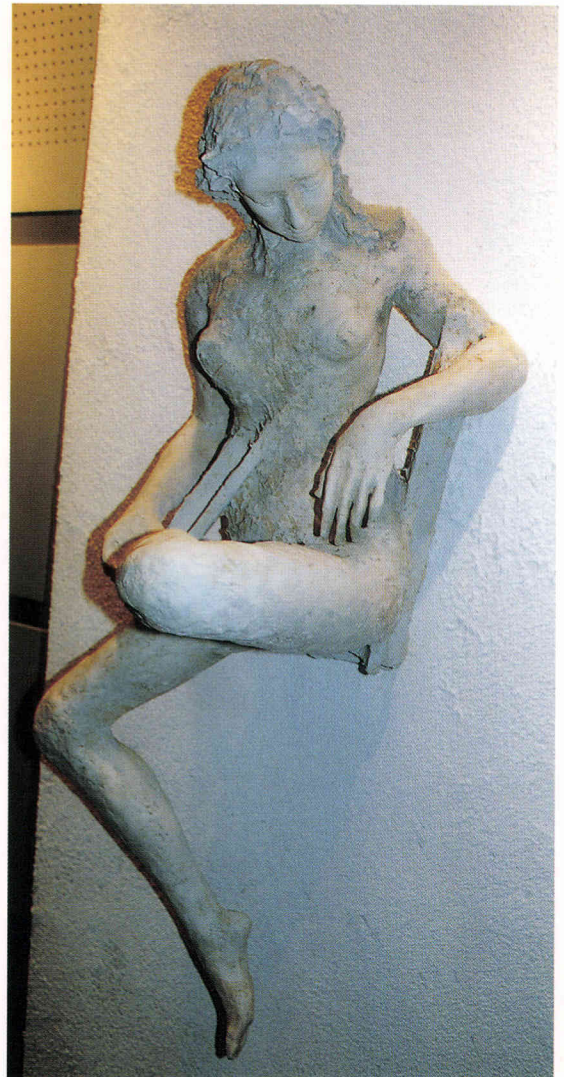
四谷シモン



大井要



たがわまさき



戸田和子

高木治美人形たち展

せ・らゐる（東京・原宿）
十一月十二日～二十日

どの人形も手のひらに乗ってしまうほどの稚児の和人形ばかり二十点。最初は通常の大きさの市松人形やアンティークドールも作っていた高木さんが、わずかに十五センチほどの人形の世界にひかれ制作を始めるようになったのは、人形ブティック竹取物語で十センチほどの市松人形を見てから。石塑に胡粉で仕上げた作品は、「柿はいかが」「アヒルの行列」など全てポーズが異なり、小さな子供の動きや表情を豊かに表現している。小さいだけに、髪付けや面相には苦労するというが、東玉より注文も受けるようになり、夢だった人形作家になることができた心から喜ぶ高木さんの制作には、ますます磨きがかかっていくのだろう。



市村陽子・宮崎みえ二人展

banboo（東京・原宿）十一月十三日～十七日



日当たりの良いカフェテリアに隣接した小さなギャラリーのウインドウ越しに、茶目つ気のある人形が歩く人の視線を引いていた。人形の作者はエコー・ド・シモン出身の市村さんと宮崎さん。は虫類などのアクセサリーをあしらったロック志向の人形の市村さんに対し、宮崎さんは、カーニバルに出かける華やかで愛らしい子供の人形と、二人の個性は対称的だ。だが共通して二人の人形の表情に晴れやかさがある。聞けば、悲しみの表情は作りたくないというので二人の気持ちは一致しているのだという。二人の小さな展覧会はこの街の風景によく馴染んでいた。

たがわまさき 創作人形展

昔人形青山ギャラリーK1
十一月一日～十二日

二年ぶりの活動再開後、初の個展である。およそ二十体の鬼、月、花、河童など、自然界をモチーフにした人形に変化はないが、作風は、より濃密で過激になった。搬入の際の包装品でもあったエアキャップやハートロン紙で、一見、無造作で大胆に包まれた会場を見て、「準備中ですか？」と、戸惑いを見せる人もいたが、会場に入るといつの間にか、鑑賞者もまた、たがわ氏の人形世界に取り込まれていることに気がつく。「作品も装置も自由に触つて、動かし下さい」と作者は、涼しい顔であるが、他にも、天井から吊下げられた、道祖神様の男根に鼻先をかすめられて驚かされたりと、寡黙な作家のいたずら心といったユーモアが随所に仕掛けられていて、日頃、あまり人形に興味を示さない人達にも好評だった。テーマである自然界も、人里離れた自然ではなく、怪しげな人間界と表裏一体にある自然界で生々しくもあるのだが、やわらかな布の感触と透明感のある色使いの人形達には、その二つの世界のどちらにも属するともなく、軽やかに会場内を浮遊し続けているようでもあった。（A・写真五頁）

大井要展「封印の鏡」

十一月十八日～二十六日
メノワ（東京・虎ノ門）

個展をするのにいつも三年ほどの年月を掛けて制作をするという大井さんにとって、今回の「封印の鏡」は三回目。タイトルの「封印の鏡」は日本神話等をモチーフにした大井さんの創作による冒険ファンタジー。邪神の封印が解かれたことにより、怠惰な少年トキが世界の危機を救う旅にでるといふ物語。思わず「呪いのテレビゲームを連想するような設定とキャラクターである。作品も遊び心でこりに凝っていて、もちろん技術的にもだが例えば幅二メートルほどの宝船の微細な細工部分にも作者の神経やユーモアがにじみほどこき届いている。約三十点の人形や小物の内、動物をモチーフにしたものが目立つ。そのアイデアと造形にクレイジーといいたいほどパワーを感じるが、人間の人は動物に比べやや精神的に自由さを欠いているような気がするのには、筆者だけであろうか。次回は「封印の鏡」の完結編で、既に制作計画は進行しているそう。

戸田和子 遙かなるビッグ
ホーン十一月二十二日～十二月三日
ベル・ギャラリー（東京・大森）

人形と彫刻との間で、戸田さんの創作への情熱のほとば

しりを感じるような展覧会である。戸田さんの属する国際現代美術家協会の金属オブジェ作家である齋藤寿氏との合同展だが、戸田さんはレリーフ（写真「翔べない天使」）などと立体あわせて五二点を展示し、人形作家という名にとどまらない迫力である。石塑で作られた一般的な人形から、樹脂や建築素材などを扱い、またそれを独自にアレンジした大小のオブジェやレリーフまで様々な形状の造形物を見ると、作者の旺盛な好奇心と大胆さに圧倒される。建築物に人形を取り込むという考えを踏まえての制作で、耐久性を考え焼物なども試したそうだが、鯨氏の金属のオブジェとよく調和していた。戸田さん自身は彫刻と人形のボーダーラインについて、双方にとって可能性を広げることになればよいと考えている。作品から感じる伸びやかだが重みのあるエロティシズムは新たな領域に大胆に飛びだそうとする彼女自身の自由だけではない何かを象徴しているのだろうか。（写真五頁）

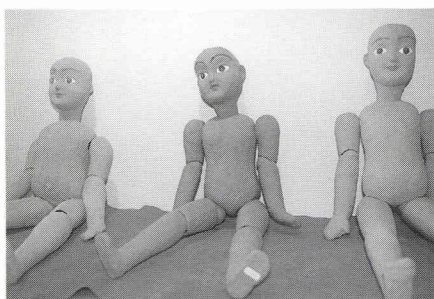
小沢幹子展

十一月二十七日～十二月二日
スペースハウゼ（東京・飯田橋）

以前エコー・ド・シモンで見た過去の教室展のアルバムの中に、各年の多くの生徒の中で名前が判らなくても必ず作者が特定できる人がいた。それがこの小沢さんである。この初個展は現在までの総括である。坊主

頭で裸のピンクの抱き人形、黒人や衣装を付けた抱き人形のどれもが、プリミティブでありながら、そのたどたどしい造形を計算に入れたのではないかと思えるほど洗練されたセンスを感じる。

小沢さんはエコー・ド・シモンに開校当初より在籍、シモン氏を師匠と呼び心から尊敬するが、その絶大な影響力はプレッシャーでもあり、そこから脱出するエネルギーは相当なものだったという。この個展は若い人に人気があり、「ぶつとん」というほめ言葉もあったらしいが、本人曰く「まだまだぶつとんでいいない」。これから氏に頼らずに自分を高めていかねば、と語る小沢さんのこれからを見続けたい。





ラ・バンボーラ高橋節子展
十一月十九日〜十二月十二日
西武池袋店（東京・池袋）
会期を二部に分け、一部では高橋節子さんの個展として人形やレリーフ、鏡絵など百点あまりを展示した。中近東の王族の結婚式をテーマにした鮮やかな色調の新作は、作者の特徴である動きのあるポーズに、金のレースをふんだんにあしらった砂漠の金沙を浴びたような印象の若者の群像である。この新作に加え、布張りで穏やかな家族の情景を描いた作品、ワックステールで違う質感に挑戦した少女人形など、作者の素材とモチーフに関する幅の広さを見ると、一人の仕事とは思えないほどである。そんな精力的な作者のメインテーマは、民族的風景を通して女性の力強さを表現することで、今年はバキスタに旅し山奥の民族を描写する予定だという。二部ではラ・バンボーラから十二人がクリスマス関係の作品などを展示した。

四谷シモン 「人形」

一九九五年十二月二日〜十五日
アプトギヤラリー（東京・早稲田）

ガウディの建築を思わせる一風変わったタイル張りのビルの地下にそのギヤラリーはあった。角度という概念を忘れさせるような非日常的な建物の階段を地下におりていくと、白塗りの壁の空間にすんと抜ける。がらんとした部屋の奥に、キリストとおぼしき頭像を中央に左右に天使像がある。左の天使は、緑の木箱に白い羽、右の天使は赤の木箱に猛々しい茶色の羽。左の天使は、既に弊誌六号の表紙で紹介した作品だが、この作品がメランコリーを感じさせるなら、赤の木箱の新作は前作と同じ型を使いながら、その色が象徴するようなエネルギーを感じる。そして箱の内部には、溢れんばかりに天使が描かれている。作ることの喜びが最上だと語り、これからの制作に意欲的なシモン氏には、今年は展覧会の予定があり既にアイデアや新しい試みを胸に描いておられるようである。シンプルだが、氏の時間の流れを迫体験し、これから何かを切り開いていく力を予感させられる展示であった。（写真五頁）

◆教室展・合同展

サラ デ モーラ

佐々木美美子と仲間達展
八王子市駅ビル市民ホール（東京）

一九九五年十一月四日〜九日
紙粘土
や石塑を
使い、エ
スニック
なテーマ
を得意と
する佐々
木美美子
さんの教室展。ク



ラウン、妖精、タイや中近東の民族的な風景などをテーマに、習作や自由制作を合わせ約百点を展示した。

稲辺智津子教室展

十一月二十一日〜十一月二十六日
日ステップスギャラリー（東京・銀座）

毎年恒例の教室展で、自由テーマで三十一人の生徒が固定ポーズや関節人形を出品。講師の稲辺さんによれば、それぞれのカラーを出すための自由テーマなのだが、憧れからか、全般的に講師の作風への執着を感じた。その中で、金井賀江さんの和紙を張った作品は傑出しており新人として果立つ可能性を



金井賀江作品

感じた。

中西京子教室展

十一月二十一日〜二十六日
ロイヤル美術館（東京・銀座）

七年ぶりに開催された教室展とあって、共通のテーマ「花」をもとに、六十五点あまりの力作の競演となった。それぞれの作品に制作前に発想したという歌や言葉の入った色紙が添えられ、趣のある教室展となつている。華やかさと情熱的な動きが中西和紙人形の大きな特色だが、花を擬人化して表現するにはこの和紙人形の技法と素材そのものがよく合っていたのだらう。抽象的なテーマだけに発想や色使いの幅が様々に広がるが、その表現の要求によく応えている。また、この教室展で、



大河原玲子作品

中西京子さんは新企画の第一作として白無垢の和紙によるハムレットのガートルードを初公開した。

第十三回 日本創作人形協会 会展

十一月二十四日〜二十九日
東急日本橋店（東京・日本橋）
日本創作人形学院展と併催された日本創作人形協会の定例

展。全国から約八十点の参加があった。グランプリは神奈川県丸美鈴さんの「作品A」、新人賞は群馬県小林とむぼさんの「海に」、テクニク賞は大橋敏子さんの「空想」など各賞受賞作品の展示があった。受賞のない作品でも、アイデアや表情に苦心の跡が見られる作品が多いのが印象的だった。教授陣からは所由紀子さんなど十人が出品した。



丸美鈴作品

創作人形展

十二月二十六日〜一月三日
プ
ランタン銀座（東京・銀座）



小牧多賀子作品

昨年二月に続くプランタンの創作人形展。和風の人形を中心に、杉田明利、黒川早恵美、山田富子、山本七生や和紙人形

から神本光子、尾崎容彩など新人が出品した。他に小林美枝子、丸美鈴、小牧多賀子、大槻和子、荒木野馬らが出品。年末年始の買い物客がしばし足を止め、じっくり鑑賞する姿が見受けられた。（敬称略）

工房イココ お雛展

一九九六年一月二日〜十六日
工房イココ（倉敷）

十一人の創作人形作家による雛人形展。雛というテーマで統一されているだけに、各作家の個性が比較されて興味深い。一人が二〜五作を出品。黒田有美子は昨年のグローバル・ドール・ソサエティのコンテストで受賞した愛くるしい男女の稚児の作品を、後藤朝子は京人形、総野美代子はコミカルな雛を、ねずみ雛の京谷安子や立花則子、他に春木均夫、藤井郁江、国沢トミコ、武内美津子、熊井悦子、木原幸子らが出品した（敬称略）。店長の生間さんは、作り手の愛を伝える仕事に幸福を感じ、これからも様々な作家と出会いたいと語っていた。



黒田有美子作品

古田文 人形展

十一月十九日～二十五日 ギャラリーオガタ（東京・銀座）
人形制作を始めて十年あまりになる古田さんの初個展。様々な素材に意欲的に挑戦する古田さんはオープン粘土に始まり、



今はビスクやバッキングの人形を制作する。その素材に合わせて、表現方法も異なる。「旅人」と掲げられた一角は、初期のオープン粘土の作品群。石を磨きあげたような粘土の質感が乾燥した高地に住む人の肌を感じを良く表現し、アジアの素朴な遊牧民の情景を浮き彫りにする。聞けば、創作の原点は作者が遊牧

に人間の原点を感じ、限りなく憧れていることだそう。ビスクを単純な形で人形にした音楽演奏のシリーズ「エチュード」や、最近のバッキングの作品なども作者の持ち味は出ていて楽しめるが、筆者は初期の作品に作者の精神性を深く感じ味わい深いと思っている。

熊倉聖祥展 十一月二十二日～二十七日 紫ギャラリー（東京・日比谷）

国内の雛人形や市松人形の顔のデザインを幅広く手がけ、後進の作家のために天会を組織するなどの活躍を考えると、今回の個展が熊倉氏にとって初個展であるとは意外である。シルクロードをテーマにした色鮮やかな美人像や、子供の人形に加え、油絵作品も展示された。上品で整った稚児の顔立ちには完璧という言葉が連想する。熊倉氏は、作品を彫塑と相通じるべき美術のジャンルとして考え、人形（ひとがた）造形と呼ぶ。その時々の素材を取り入れるのも文化だと、新しい素材も積極的に取り入れる。作家は自分の哲学を持たなければと語られていたが、美しく完璧な作品を見ながら「芸術であるならば

見る人に感動を与えなければ意味がない」「芸術は自分のために出なく、大衆のためにある」という言葉に、氏自身の哲学を感じた。体の動きによって変わる衣服のしわのすべてが頭の中に入っているということに代表されるように、現在に至るまでの氏の研鑽と経験が、この哲学の裏付けとなり、多くの人に愛でられるひとがたを生み出しているのだろう。

福田朝子 人形個展 ギャラリードウシャルム（東京・銀座）十月三十一日～十一月六日

入り口を入ってすぐ、のんびりとした表情で出迎えてくれるおばあさんの人形「淡々」（写真）が、福田さんにとってこの四回目の個展を特徴づけている。制作歴が十五年という福田さんは浅見恵子さんや山吉由利子さんに師事し以前は抱き人形



も制作していたが、今回は長い間あたためてきた立体スケッチの構想を実現することになった。リアルであってこそつくり人形ではなくて、スケッチである点にこだわり、身近で自分もこうなりたと思うようなお年寄りや、作者のイメージの中で人形にしていた。「淡々」はその第一作である。三十七センチ前後のバッキングの人形でどこにでもいそうな老人が十五体、ひなたぼっこをしたり、おしゃべりしたり、見る人の口

元が思わずゆるんでいく。他に子供や妖精の作品もあり、今後作者がこの作風で世界をどのようにに広げていくか楽しみである。

吉田良一人形展

十二月四日～十六日 ギャラリーアメリカ（東京・青山）

長期にわたりコンスタントに創作人形を紹介してきたアメリカにとって、初めての吉田良一展。シンプルな構成の会場で

は、かつて写真集「星体遊戯」で話題作となり、多くの作り手に影響を与えた坂口安吾の「桜の木の下」のイメージの着物の抱き人形など三体を中心に、近作のトルソーやフアンの多い関節の抱き人形の新作などが展示された。この三体は、しばらく展示がなかったこと、本人にとって過去を再確認するためのものだったという。「桜・」の人形はひときわ迫力を感じさせたが、片隅にあった巡回展中に破損し腕をなくした旧作の自動人形（写真）の不思議な存在感も忘れられない。吉田氏の人形は、徒に古くなるのではなく、作家の時の重みを受けとめる人形なのかもしれない。ギャラリーの山口氏は、同性として吉田氏の作品を、生のすごさを感じながらどこかつかしさを感ずると評する。吉田氏は今回の個展を「まだまだですね」と自己批評し、今抱えている漠然としたものを形にするためにも手を休めずに作り続けなければならないと語っていた。



人形気分

連載第二回

手前味噌

文 青山恵一



先日、名古屋での人形展の折り、以前から親しくしていたいた地元の人形屋さんに案内状を出したところ、破産管財人の名の入った紙片が貼られて戻ってきた。子供達が人形遊びから遠ざかって久しい、街の人形屋さ

んな無茶したら、お人形さんが泣いてはる」そんな言葉を、子供の頃、幾度も聞いた。

赤子を抱くのと同じ様に、子供達にとつては、人形を抱くのもまた難しかった。力いっぱい握りしめるものでもないし、ゆるければ落としてしまう。ここでも子供達は「手かげん」という、自分の身体でしか覚えられない知恵を身につけた。パソコンのキーボードを見事にこなす近頃の子供達は、我々の世代に羨望でもあるが、「人の痛み」や「手かげん」という曖昧な感覚を、学び損ねてしまった。途中がなくて、行きつく所まで、行ってしまうのである。相手のココロやカラダを、どこまで痛めたら、この子は壊れてしまうのか、その痛みや手かげんさえ心得ていれば、死に至るまでの「いじめ」もきつと避けられた。

ミキハウスやミニバツ

のカラフルなベビー服を子供に着せて、得意気に歩く若い母親を街角で見かけると、「着せ替え人形遊び」が、こんな形で残っていたのかと感心するが、もはや、現代の子供達に人形遊びは蘇りはしないのだろうか。人形文化がもっとも華やかだったのは、大正から昭和初期にかけての時代で、大人の文化と子供の文化が仲良く融合した時代でもあった。

同時にそれは、絵画、文学、音楽の融合でもあったから、パリの印象派にも似ているが、世代を含めてまでの融合は日本独自の文化で、その中心に人形があった。夢路の「花嫁人形」は、童謡でもあり流行歌でもあったのだ。

第二次世界大戦までの僅かな期間ではあったが、あらゆる文化が成熟し、人々が生活をおう歌した時、人形もまた幸せに生きていくことができた。

さらに振り返ってみると、江戸の庶民文化がもつとも発達したといわれる文化文政（一九世紀初頭）頃には、御所人形や市松人形の逸品が、集中している。人間が人間らしく、人形が人形らしく、その位置関係がはつきりしている時代は、良い時代と云えた。当然のことながら、人形は、人形遊びをしない、遊ぶのは、人間だけである。街角で見かけた着せ替え人形の子供も、残念ながら人形遊びはしないだろうと、だから、想像するのである。

「人形遊びは、時代を良くします」
無理を承知の理屈だが、時々、店で使っている。

（京都・昔人形館青山店主）

写真 明治時代の抱き人形
（昔人形館青山）

大井要

(おおいかなめ)

大井要さんが一回の個展のために三～四年前から構想を練り、じっくり制作をするということは一部の人の間でよく知られていたことらしい。それだけにたった一週間あまりの彼女の作品の発表の機会は貴重である。昨年11月に3年ぶりの個展を開催した大井さんにお話を伺うことが出来たので、人形同様痛快的な彼女の言葉や思想と一緒に味わっていただきたい。

インタビュー・文 小川千恵子



しよせん人形

■ 大井さんの個展は一貫した物語に沿っていて、それぞれの個展に年数をかけて制作をするとのことですが。

大井 今回は自作の物語『封印の鏡』に沿って、人形を焼き直しなどして、四～五年かけて個展をやりました。今まで別のテーマも含めて三回やって、ほぼ完売しました。次は第四部にむけてまた二～三年かけます。

■ でも、この物語の写真絵本を作ることが希望としてあるとのこと、それでは人形を売ってしまつては、また集めるのが難しいのでは？

大井 うん。その時はまた焼きなおして全部作りなおします。私は作つてしまった人形には、全然未練がないんです。人形作家の一番いけないところを考えたとき、それは自分を過大評価しすぎることに。自分で売つて、そのお金で次に出る作品の構成をしていかないと作家とはいえない。それに、きつちり売るといふことを、みんなしていかないと。箱をどうするか、発送をどう

するかとか、というようなことも含めて。それだけでも作品に対する考え方が変わります。

■ お金つてすぐ下世話だけど、大事。お金のことを意識しなければならぬ。みんな作品に値段をつけたとき、この値段で自分は買つか？と問い直さなければ。思い入れをプライスに反映させる作家がいますが、買う人はそれを欲しいわけではない。とにかく材料費だけでいいから、次へのステップになればいい。自分の人件費を入れられる時が次に来る、と私は思っています。そこに到達できなかったら、それだけの作家だったという事なんです。

■ 私も人形でビジネスをしています。そういう金銭面から見たプロの作家としての厳しい自覚をもっている方って少ないですね。市場が出来上がってないせいもあると思いますが、価格は本当に皆、勝手な付け方をしているような気がします。作品を見て、本当にこの価格？と思うことがありますが、それで売れたりしてしまふ。でも、それは親戚や知人がご祝儀で買っていくからじゃないかって

私は親戚価格と呼んでます。でも、この人はプロだな、と思う方は、皆妥当な価格をつけられていて、幅広い方に買われて、いつも成功されているようです。

大井 みんな製造業という根本を忘れてるのよ。ものを作る人は皆製造業ですよ。

■ そういえば、金属を扱う作家が、登録は「板金業」として聞かされたことがあります。(笑)

大井 しよせん人形じゃないかって思っています。人形を作るとは、別にえらくもないし、またアーティスティックなことをやっている人が特別にいいってわけじゃないからね。以前、デパートでの合同展に出品したとき、他の人形作家の方を見て、何をそんなに気に入ってんだらう、って感じたの。彫刻だって、絵だって、しよせんそれだけのものなのよ。ピカソとか政治的に入り込んで主張できる巨匠なんてそんなにいないわよ。そこに哲学や主張を入れて作れる人の割合は宝くじに当たるより難しい。私はそう考えています。ちよつとできるからって、その気になつたって

しようがない。自分が楽しんでやっているんだから、それで人も楽しんでくれるばそれでいいんです。私の作品を好きな人も嫌いな人もいるでしょうけど、それはそれでいいじゃない。それなのにカリスマ性とかそういうったスパイスで価値を上げて、作家をおもねつてへんな出方をする人がいますよね。人形作るより、関西の震災のボランティアをやっている方がどんなに人の役にたつということくらい、自分のやっていることを冷静に見られるくらいにならないと。何かしているとき、それが人のためになることかと考えられる方が人としては上等よ。だから、しよせん人形、たかが人形、そう思わないとだめ。私のやっていることなんて、本当に屁みたいなものです。現実はそのうだと思ふ。でも、何か役に立つんではないか、そういうところに自分を持つていくにはどうしたらいいかって考えるようになれば誰でも作品はだいが変わります。



ジュサブローの影響

大井 人形を作っている人で本当にすごいなって思った人はいない。唯一好きだったのは、辻村ジュサブローさんだったけど、最近の作品にはもう興味がありません。技術は素晴らしいと思いますが、今は私の中でひかれるものを感じない。

■ 誰かに似ているっていうことはものすごく失礼な言い方なので、私の感じたことを素直に聞いて下さりそうな方にしか話さないのですが・・・

大井 あ、私は大丈夫です。なんでも話して下さい。

■ 私、初めて大井さんの作品を見たとき、ジュサブローさんぽいなって感じました。印象に残りましたが、その時そこで興味が薄れたということは、確かにありました。

大井 ジュサブローに影響されているのも、それを言いたくないのも本当。ジュサブローの真似はしていません。確かに彼の技術はすごいです。本当に天性のものだと思う。まだ真似と言われるのは、その程度だということです。技術については、私は逆立ちして

もあの技術は真似できない。ジュサブローの里見八犬伝は好きで、テレビを食い入るように見ていたから、やつと真似されたと言われるようになったのかという気持ちもあります。似ていると言われても腹も立たないだろうな。彼は先に生まれているし、影響されていないと言ふのは無理。敬意を払いたいのには四谷シモンやジュサブローがこういうものがあるということ世に知らしめたということです。でも私は、次にはここを抜けて変わってくると思う。

■ 私は大井さんに是非、抜けて欲しいですね。オリジナルな展開がとても楽しみだし、それだけの力をお持ちだと思う。

大井 私は、人形をあいう風に仕立てないと思います。それは年代もあると思う。八犬伝のように物語があると楽なので、私も随分人形を作るための物語をさがしましたが、著作権の問題などを考え自分で作ってしまいました。それが『封印の鏡』です。個展で小川さんも言ってたけどファミコンのゲームにしたいと思うようになったんです。人

形劇にしようと思うと、現代ではそのようにやり方が変わってくるのではないのでしょうか。

■ 大井さんの作品は、本人が楽しんで作っているんだろうというような遊び感覚の楽しさを感じますね。その明るさはジュサブローさんとは異なるものだと思いますが。

大井 楽しくやるのは重要ね。でも、その明るさや暗さは資質じゃない。年代です。あの暗さを時代が受け入れたと思う。その辺は小手先で出来ることで、その時代に合わせて技術で明るいものも作れたはず。実際彼はテレビの人形劇用に明るい人形を作っているんです。

ピュアであること

■ ジュサブローさんだけに興味を持たれたという事ですが、一方で四谷シモンさんの亜流と見られるシニールな作品の傾向については、どう思いますか？

大井 私はシニールなものは嫌いです。そういう傾向の多くの人形作家にアトしてる自己満足を感じてしまう。それに見合っ

た哲学をして欲しいって思いますね。

■ それは同感です。私はベルメールやシモンさんの作品などシニールなものも好きですが、そういう作品にはそれだけの必然性があったの表現だったと思うし、川の向こう側の世界だと思っています。でも、実際にはこちら側でその外見の異常性だけを追求する人が多いですね。精神性を伴ってなければ、お化け屋敷の造形物との区別がなくなる。かえってお化け屋敷のがデッサンも素材もしっかりしている。

大井 ここに昔の芸術新潮の精神異常者の芸術を集めた号があるんだけど、これ、すごいでしょ。私の大好きな絵もあります。私は彼らに比べると、ピュアな感じでものを作っていない。また、嘘をついていると思う。私だけでなく、今、人形を作っている人達のもので、技巧的だよね。こういう本を見たり、テレビの震災のニュースを見たりしていると、人形を作ることとは自分がどこに所在を求めてやっていたかと考えた方が救われる。でも、ストイックということではない。



自分に嘘をついているという事を認識しないと。人にいいと言われると、前に行くこうとしている自分に嘘をつく。

夢と現実

■ 大井さんは、人形よりは他の分野に興味があるのではないですか？

大井 そうです。かえって絵や彫刻の友人が多いし、その系統のものをよく見ています。人形に関しては、古い市松人形にしか興味がありません。人形を作るきっかけは、古い坊主の市松人形を見て買えなくて、作り方を竹取物語に習いに行ったことなんです。

■ そうだったんですか。

封印の鏡 あらすじ
夜を司る天空の闇の女神に仕えるよう香（ヨウ）は、ふとした間違えから女神の怒りを買ひ、地上界にとばされてしまう。地上では天空の女神達に封印された邪神奸（カン）が言葉巧みにヨウをだまし、封印をとかせてしまった。カンが天空の闇を司る鏡を自分を封じ込めていた封印の鏡と交換、逆に闇の女神を封じてしまった。事の重大を知った天空の女神達はかつて自分に仕えていた怠惰な少年伽（トキ）にカンの元へ向かうように命ずる。八人の従者をあてがわれ、トキはひとまず冒険の旅に出るが...

■ ああ、確かダーククリスタルはセサミ・ストリートのマペットをデザインした人が制作した作品だった

と記憶しています。ウゴウゴルガは面白かったですね。すぐに終了して今はNHKが天才テレビくんでアイデアを真似してやっていますが、あれは面白くない。作品や物語の発想はそういうものも関係しますか？

大井 夢みたいなものを作っているわけだけど、夢を見るには現実をちゃんと見ていないと出来ない。現実が夢を見るための原動力なんです。だから、大根を買うとかいうきちんとした日常をやっている人が、夢をみれるんだよね。地に足がついている現実があるから夢を見られる。だって、いつもいつも夢を見ているわけにはいかないですよ。

画廊との経験

■ 江戸つ子ですか？

大井 東京です

■ そうじゃないかと思っただんです。大井さんの話の方って歯に衣着せないし、氣つぷがいいし。

大井 はつきりものを言っちゃいけないという傾向が多い。やつぱりストリートに言われるのが駄目なんじゃないかな。みんな、批評を受けることが出来ない

んですよ。

■ 私は、批評を受けられないのは、その人が未熟なんだと思います。

大井 私も個展の時、色々批評を頂きました。それは、みなの得ていています。私だけ気がついたことをその人にも気付かされると、くやしいうって思います。だから、私はその批評によって、その人を見ます。だって、全部の作品がいいって訳がないですから。

■ 多くの人の目に触れ、批評をもらうということは大事ですね。でも、作家が成功するほど客観的な評価を得にくくなりますね。パトロンなどがつけばプロの作家として安定するのもしれません。

大井 作家として守らなければならぬのは、安定を求めてはいけない、ということ。現状維持を求めちゃいけない。不安になるというの分かるけど、不安は不満にはなりません。何の心配もなくなったら、何を作ったらいいか分からなくなります。サラリーマンのように毎月決まった額を持つてくることが全ての価値基準ではないです。人間の質が上等か、そうでな

いかはお金じゃない。それに、作品をきちんと評価できる人はゼロに近いです。「号」とかお金の額で人を計るのが、私は日本で一番嫌いなこと。お金は必要な価値基準であるけれど、それで人を計ってはいけません。私の場合は、夫にご飯を食べさせてもらっているからこれをやっています。お金が欲しくやってるんじゃないから。

■ 主婦である作家が多いですが、それが作家であることとは関係ありませんか？

大井 でも確かに主婦であるという事が、甘えの要因になるということはあります。

■ 以前デザイン関係のお仕事をしていたとお聞きしたのですが。

大井 基本的にはディスプレイだったんだけど、劇場美術やグラフィックデザインもやっていました。メーカーのセグチでも三年ほど企画をやっていました。私は自分がどの大学を出たとか経歴を書かないようにしています。

■ それはどうして？

大井 肩書きが大事よね、日本は。個展をやるのに最



仕事場の大井要さん

傍らの福助にはちょこんと麦わら帽子が被せられていた

初、デパートや画廊など随分回りましたが、全部蹴られました。前例がないからって。数字やデータが大事なよね。現実を見て評価できる人間は少ないです。でも私は作品で評価して欲しい。

■ それはすぐよく分かります。

大井 売れない人形は悪い人形かというところでもない。プロデューサーの人に問題があるのは事実。ビジネスにはリスクがつきまとい、忘れているところが多い。

■ 詳しいですね

大井 はい。長い間つきあいましたし、見てきましたから。はじめは、ああいう人達はシステマチックだと思っていた。グラフィックの仕事をしているときはそうでしたから。でも、画廊とか画廊といわれるところにシステムがないので驚いたんです。売れる作家だと、画廊はちゃんとつきあってくれます。でも、人間としてのつきあいは普通にするけど、画廊とくむならば性格的によっぽど相性が良くなければ。相手に食いつぶされてしまいます。ずつつきあってきて分

かったのは、「あの人達って作品入れなかつたらただの人なんだな」ってことです。だって、あの人達はものを作るのが出来ないんですから。

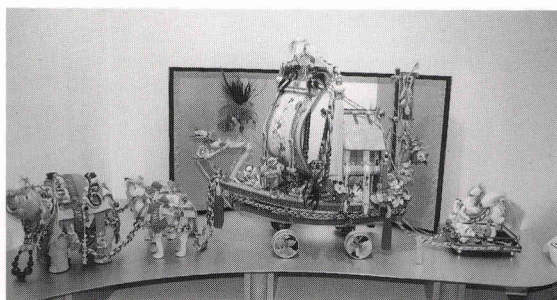
■ 彼らは非常に権威主義的なところがありますね

大井 権威とかもし求めていくのなら、もつと業界として確立しないと駄目です。いいものだったらお金になるというマーケットがないと。産業として成り立っていく必要があります。

■ 今後の展望は？

大井 また『封印の鏡』の完結編の個展にむけて制作をします。それから、まだ予定なんだけど、郊外に引っ越してサロンをつくって人が集まれるようにしたいと思っています。今まで人に会わないようにやってきたんだけど、作品を展示しながら今度は画廊ではなく、自分のやり方で成功したいと思っています。

*ウゴウゴルーガ
フジテレビ系列で数年前に放送された子供番組。コンピュータグラフィックスをふんだんに使い、ナンセンスなジョークやキャラクターを輩出、子供番組にデカダンス的な要素を持ち込み大人のファンも少なくなかった。



インタビューを終えて

原稿おこしをしてみても、改めて大井さんの口調に迷いの言葉が少ないことを感じた。筆記された文を話すがごとく、理路整然としており、質問を投げかけても既に用意されたがごとく筋の通った答が返ってくる。つまり、大井さんの中では私の考えるようなことは既に経験済み、思索済みだったのではないかと推察するが、その思索にしても半端ではない、彼女の作品の完成度に匹敵するほど熟考されたものであると思う。きつと今までに多くのことを自問自答されてきたのであろう。妥協せずに答えを出してきたからこそ、プロとして他の作家や関係者に対し厳しい見解をもつのだろう。これはプロとすれば当然のことなのだが、その反面、人の意見には、謙虚に耳を傾ける。そこに大井さんの人柄のやさしさを感じるが、またプロとしての謙虚さでもあるのだろう。何にもとらわれない自由な精神世界の広がりを守り育てていくだけの意志の強さと技術を大井さんの人柄と作品に感じた。個人的には彼女の執筆による冒険ファンタジー「封印の鏡」の完結編を早く読みたいこともあるが、二三年後に予定されている個展での展開が今から待ち遠しい。

(小川千恵子)

連載第四回 私のメガネで見たあなた

“ああ、他人の目に映る私を我が眼で見る力を与えたまえ”

スコットランドの詩人ロバート・バーンは翻訳しにくいスコットランド英語でこう言った。この雑誌の編集長が日本の現代人形について述べて欲しいと私に言ってきたのも、この詩の意味することからだと思う。私はコレクターであって芸術史の専門家ではないが、

伝統的な操り人形がある国は変化に富み独創性のある人形作家を生むのだとわかった。日本も例外ではない。人形は単に動くだけではなく語り手の役割も果たしている。だから性格を表すために表情とか衣装に細心の注意が払われているのだ。優れた作品はじつとじていても物語を語る。

その国の生活水準も重要な要素だ。でなければ、東ヨーロッパやインドのような国からも欧米や日本に匹敵する人形があらわれるはずだから。

私たち外側の人間が知っている日本の創作人形芸術を考えると、歴史で習ったペリー提督と一八五三年の日本開国が頭に浮かぶ。それ以来日本の文化はかな

り学んだけど、日本の人形の世界は狭い隙間から覗いていたように思える。

定期雑誌の、それも通常三月号にはデジャ・ブ体験のごとく、雛人形の紹介が繰り返され、着物をなびかせたエキゾチックなほどよい作品が例として挿し絵に使われている。次に人間国宝（か、その弟子？）についての文章があつて、私などは日本の人形作家の活動を

をもっとよく知ることが出来るかも・・・と期待を抱くようになった。

長い間待ち続け、一般向けではあつたがついに一九六八年にマサタカ・オガワによる「不朽の日本工芸」が日米両国語で発行された。一九

九六年二月号のドール・リーダー誌に掲載された小川千恵子の素晴らしい記事によれば、その一九六八年には人形作家の新世代が新素材と形式を持つて既に活動を始めていたという。「不朽の日本工芸」では平田郷陽、堀柳女、鹿児島寿蔵を扱い、著者は人形作家の章の前書きの中で、人形を彫塑と呼ぶことに対して実

に曖昧な印象を与え、「この三人だけが日本の真の人形作家ではない」と読者をじらす。他の作家とは誰なのかというのを知るのに、なぜ私達は二十年以上もの月日を費やさねばならなかったのだろう。

そのヒントはツネ・スギムラの「フォトグラフィアーズ・ノート」にあるかもしれない。彼はその中で写真



で紹介した日米ドールアート文化交流事業は姿勢の変化とアメリカの水準が上がったことを確実に表しているものだ。

しかし、その時日本人作家の作品を目の当たりにした人の数はごく僅かだし、もはや絶版となった「不朽の日本工芸」を読んだ人もほとんどいないだろう。

一九八〇年にナショナル・ジオグラフィックの「日本の人間国宝」という映画の中で、人形作家の代表として鹿児島寿蔵が紹介されているが、それも全五九分の中の五、六分にすぎない。

さて、私達があなた方日本の人形作家をどう見ているかですって？要するに、見ていません。だって今までほとんど見たことがなかったのだから。十二万部を発行しているドール・リーダー誌の特集「日本のドール・アート」は大きな前進で、三輪輝子の「天草四郎」が表紙を飾ったのは偉業なのだ。なぜなら年に九枚になる雑誌の表紙のためにどの人形が

集に多くの人間国宝を同時に収録するときの難しさを説いている。ニアダ（全米アメリカ人形作家協会）の創始者であるヘレン・ブラードも一九七〇年代に日本で日米共同人形展を開こうとして似たような苦労を経験したらしい。一九九五年のニアダの会議に日本の人形作家達の代表団が参加したこと（注・DFJ七号

店頭販売をのばすのか、十分な検討がなされた結果だからだ。このような出現により、日本人の作家が海外の展覧会にむけて準備をはじめているものとして、私も大変楽しみにしている。

私は一九七二年に日本を訪れた際、かなり表面的ではあったが日本を見て、日本人の現代の衣服や家具はアメリカよりもヨーロッパのデザインに影響を受けていることを知った。だから

一体ものを制作する日本の作家やドイツ語圏を中心とする作家が、多くの場合は人間の体を参考にするだけで、アメリカの作家が好む写真主義とはかなりかけ離れているということも当然のように思えた。心理学者なら戦争で同じような経験を

をしているからと解釈するかもしれないが、それは単なる偶然の一致だろう。かつて私達が日本の人形世界を覗いていたせまい隙間は小川千恵子の努力と、人形を世界の場に持ってきた作家達、海外で活躍する作家達によって窓となった。

近い将来、窓はドアとなるだろうが、その時はどちらからの出入りも自由に出来ることを願っている。



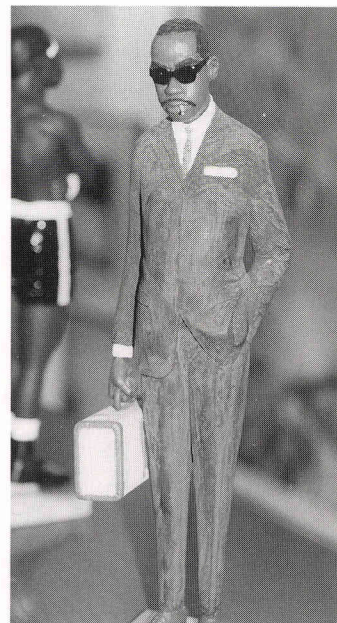
PINSPOT

ギャラリーアメリア (東京・青山)

画廊だからアートだと緊張らずに、アートが日常の中に自然体で存在する場所としたいと語る山口氏自身がカジュアルで気さくな方であり、作家と共に時代を作り上げるクリエイターとしての印象がある。

一階のアーツ&クラフツには、洗練されたセンスの陶器やガラス工芸品、版画

アートとクラフトは生活空間の中で相互的に成り立つと考えるオーナーの山口氏は、赤坂から現在の東京・青山にギャラリー・アメリアを構えて十三年になる。一階は工芸・美術品を扱うショップ「アーツ&クラフツ」、二階がギャラリー・アメリアとなっている。通称骨董通りの路地を入った住宅街にあるが、骨董類は扱わず現代物にこだわり、国内の作家を優先して紹介する。



や絵画が陳列されている。

これらの作品は、ギャラリーで展覧会を開いた作家の作品からピックアップされたもので、人形では、石塚公昭の「ブルースする人形」、武井久美子の詩情豊かな曲芸師たち、山口景子の初期の作品、微笑みを誘う陶人形の高橋安子らの作品がある。

山口氏は創作人形も日本の表現の中の大事なジャンルと考え、年に二〜三回人形展を企画してきた。紹介した作家には中村寛郎、藤井路以、細山潤子などがあり、つい最近では吉田良一と武井久美子の個展を開催したばかりである。同ギャラリーでの展覧会はほとんどが企画展か協力展であり、企画展の場合は作家の世界を十分に表現してもらうために展示内容に口出しをしていない。

約二十年間、人形界はもとより美術界を見続けた山口氏は、作品は時間・社会の中で淘汰され、本当の評価はメディアより人がしていくものだという。時間をかけて幅広い表現活動を続けていけば、いずれ何か評価されるものが出てくるだろうと謙遜されるが、いい作品を作るかどうか最終的には「人」の問題として、作家をトータルにとらえていた。

(取材・文 小川千恵子)

ギャラリーアメリア

東京都港区南青山六・十三・

二十六

☎〇三・三四〇〇・三六六三

十時半〜十八時半

写真左上 高橋安子の陶人形

右 石塚公昭作品

左 「アーツ&クラフツ」での

山口氏



TOPICS



東名高速道路

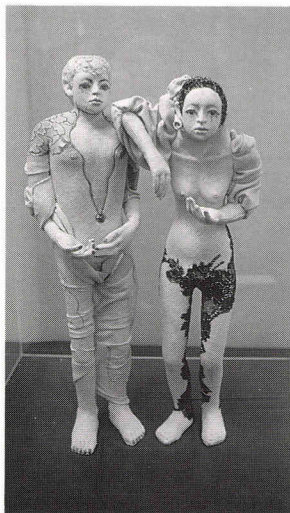
足柄サービスエリア

「十三人の人形展」

十二月二十日〜

一九九六年二月二日

展覧会場としてはかなり異色の高速道路のサービスエリア。主催者である財団法人道路施設協会にとっても参加作家にとってもはじめての試みであり、会場の性格において当初は不安を隠せない作家もいた。だが、足柄サービスエリアの黒川紀章設計による洗練されたデザインの建物や清潔で設備の整った内部は、従



山口景子の初期の作品も展示された

来のサービスエリアのイメージを一蹴するものだった。本格的なギャラリーの環境を整えるには限界はあるが、逆に職業や志向性において不特定多数の人々が、移動中の一時的休息を求めて集まるという共通の状況での芸術との出会いは、意外に効果的なものかもしれない。作家にとっても、ある意味で作品の真価がとわれるチャンスである。今回は様々な素材と表現方法を案しめるように、銅の赤川政由、木の安達忠良や岡田好永、革の黒沢正子、金属のよねやまりゅうなど十三人の作家が集まった。入場者は思いがけない人形との出会いに先入観なく素直に鑑賞、芳名帳には心のこもったコメントが目立った。四五日間の会期中一万四千人を動員し、早々に次回展の予定が決まったという。採算を優先する企画展の多い中、人形作家にはその人形を愛でる人との出会いが全てであることを再認識させられた異色の展覧会だった。

人形つれづれ

連載第八回

文 福島弘太郎



私はもとより創作人形に携わる人々はなぜこの限定された特殊な立体造型に特別の意味を抱いてしまうのでしょうか。展覧会場などでも何故人形に関心を持ち作るようになったのか尋ねられることがよくありますが、あらためてその理由を問い直してみると自分でも首をかしげるばかりで困ってしまいます。

人間と人形とはなにか生き物として原初的な部分で強い関わりがありそうですが、現代に生きる我々にとってその必要性を簡潔に説明することは難しいようです。文化としての人形は古くは暮らしに深く溶け込み生活の一部となっていました。が、その力を失いつつあ

る現代でもなお、あるいはかつてより一層表現のメディアとして未知の可能性に惹かれて創作を始める方が増えていることは一見奇異な感じさえします。

一般的に立体表現は平面に比べて素材自体の物としての制約が大きいだけに、自由な発想やイメージをそのままでは形に乗せにくいものです。物としての特性を知り、それに合わせて歩み寄ってやる必要があります。そのような現実的な不由さがあるにもかかわらず、それでもまだ人形には表現媒体として手付かずで残されている余地があればこそ、多くの人がそこに他では満たされない何かを求めてくるのでしょう。

従来の様式や手法は素材を効率よく手懐けまわりを持たせるために発

展したきたもので、人形達が長い歴史の中で培ってきた広大な土壌を鑑みると考えるあらゆる試みはすでに皆試されてきたようにも思えますが、

もしも創作の発想がその様式を出発点とし、そのスタイルを踏襲することだけを念頭に置いたものだとしたら今日のような活況は見られなかったでしょう。そこに留まることに飽き足らず新しい自分なりのスタイルを生み出そうとつねに模索している人々が増えてきたからこそこれだけ多様な表現が生まれてきたのだと思います。

創作人形はもはや床の間芸術的な範疇からは完全に脱皮し、さらに私個々人の息吹を吹き込まれることによって、人形という言葉の持つイメージの枠からも自由になりつつあるようです。その変化していく未知の

部分が創作人形の大きな魅力のひとつであることは間違いありません。

創作人形が今後どのように展開していくのか、そのたどり着く先は私にははつきりとは判りません。しかしその見えない先に向かって、多くの人達によって日々生み出されている一体一体がその時々への解答を出してくるような気がします。そしてそれらが持つ確かな存在感が私達の内にある一歩を踏み出すエネルギーを与えてくれるような気がします。

(人形作家)

*写真 昭和初期の和製ビスク人形
協力 昔人形館青山



グローバル ドール・ソサエティ

コンベンション・リポート

小川千恵子（ドール・フォーラム・ジャパン編集長）

さる10月5日から8日までの4日間、シェイクスピアの生誕地として知られるイギリスのストラットフォード・アポン・エイボンでグローバル・ドール・ソサエティ（以下GDS）の第13回目の大会が開催された。

世界から14カ国250名が参加、日本からは総勢30名ほどが参加、講習会やイベントに積極的に参加した。初日には受付をすませるとすぐに和紙人形作家の中西京子夫妻のプログラムがあり、日本の和紙の特長と人形の作り方を紹介、実演とジョークに会場は大いに沸いた。連日の講習会では、会員作家が人形のボンネットや水溶性の布を使った妖精の衣装の作り方などを講義した。私も日本の現代作家の作品をスライドで紹介した。



17

やはり参加者の関心の中心は、人形コンテストである。作る人形により創作人形のレッド、アンティークのレプリカはイエロー、現代人形作家のレプリカはグリーンと色別に分かれ審査される。日本人として、黒田有美子さんがレッドセクションの型を使わない大人の人の部門で銀賞と一般賞、ミニチュア人形の部門でブロンズ賞を、清水弥栄子さんが同じくレッドセクションのビスクの子供人形の部門で技術賞を受賞した。

同時開催された「世界人形作家展」では日本から中西京子さん、稲辺智津子さん、小牧多賀子さん、小林美枝子さん、所由紀子さんの作品が展示された。欧米からはグンツェル、ジェイン・デイヴィス、ポール・クレイ&ピータ&コウ、マヤ・ウィック、ジュンコ・リスフェルド、マーサ・アームストロングハンドなどヨーロッパを中心とした活躍中のドール・アーティストの他、デイヴィスを通しニアダの作家の作品も展示された。中西京子さんは、コンテストの審査員もつとめた。



緊張するコンテストとは対称的に、同ソサエティの「人形の作り手が国境を越え親睦をはかる」の趣旨の通り、毎晩凝った演出のパーティが開催された。中世風の食事会や、仮装パーティ、ディスコなど、楽しむときはとことん楽しむのが彼らの文化である。会長のキャロル・スタントン夫妻も初日と授賞式以外の晩は、舞台衣装のお下がりだという中世風の衣装で過ごしていた。仮装パーティでは爆笑の連続、日本から参加した「山伏」は仮装コンテストに見事2位入賞した。

今回初参加した作家の小牧多賀子さんは、全体を通し「人形とは愛でられるものだと思っているが、ここの人形をみて同じだと共感した」と感想を述べた。最終日には一般公開のドール・フェアがあり、人形素材や作品が販売された。

今年のGDSの大会は同時期にベルギーで開催を予定。今年のドール・フォーラム・ジャパン GDS参加ツアーについては未定。

GDS（世界人形協会）についての問合せ先：

大阪府吹田市津雲台2-1 C-13-101 tel 06-834-2007

朝倉和子

写真上：レッドセクション、ビスク子供人形の部で金賞を受賞した独のヴァラの作品

中：大人の人の部門で銀賞を受賞した黒田有美子さんの作品

下：世界人形作家展で人気を集めた稲辺智津子さんの作品

第4回

神様のルール



本来、神に形はありません。誰の上にも同等に降り注がれている大宇宙の絶大なエネルギー、その力に気付き、助けを求めて心の支えとしようが、気付かず一生終わろうが、そんなこと神様は一向に気になさらないのです。真言宗の開祖、弘法大師である空海は子供

思います。

でも何千年もの歴史を持つ宗教には、決して犯してはいけないルールがあるのです。このルールを知らなかったばかりに、善意から創作したものが非難を受け、心傷つき、あるいは才能ある大切な命まで失ってしまった創作者が過去には

きつとい
たはずで
す。絶対
神の本質
をそのま
ま受け入
れたイス
ラム教で
は、絶対
神はもち
ろん開祖
モハメッ
ドやその
家族、有
名な高僧
はすべて、偶像化する事は
許されないそうです。

一方インドではヒンドウの絢爛豪華な偶像化された神々の大世界、その何とも生き生きとした奔放な魅力に私は夢中にならずにいられません。でもこのヒンドウ教にも、やはりルールはあるのです。私はガルーダが好きでこれから

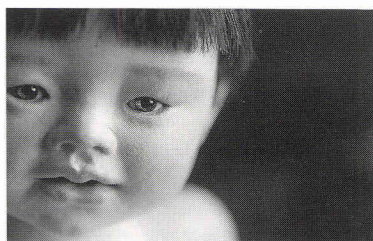
ガルーダをテーマに作っていいこうと思っているのですが、お許しが出たのはガルーダだけ。「ガルーダは神ではない」からだそうです。ガルーダは西洋でいば天使にあたいするのだと思います。神の使いの鳥の化身なので、神ではないゆえにOKが出たのです。本当はガルーダが仕えた三大神のビシヌやシバ、ブラフマンやラクシュミーなど作りたい神様はたくさんあったのだけど、私など他国の異教徒が気楽に作ってはいけな

にルールがあるのです。他の宗教の一つ一つのこ
となど、とても書ききれ
るものではありません。た
だ、宗教に神様に決まり
事は残念ながら付き物なの
です。大好きな神様を作
ってしまいう前に、教会
や寺院に、あるいは発祥
国の大使館へ問い合わせ
てみることをおすすめ
します。

今、人間はおごりすぎてしまつて、自分が神様
みたいになつてしまつて
いるのではないですか？
ある日たから「人間ど
め！くだらなすぎる！」
という声が聞こえてきて
、全
てが終つてしまつても不
思議と思えない。でも、
もしその時人間が多少で
も生き残ることを許され
たなら、
気持ちは生活も落ちつ
いたとき、その生き残り
、ある
いは新人類が最初に作
る芸術品らしき物、それ
はきつと人形です。

作る対象は今から決ま
つています。それは神様
！そ
う、人間はどうしても神
様が大好きなのです。
「あ、何か文句ある？」
今、私の神様に聞いたの
。文句ないって！

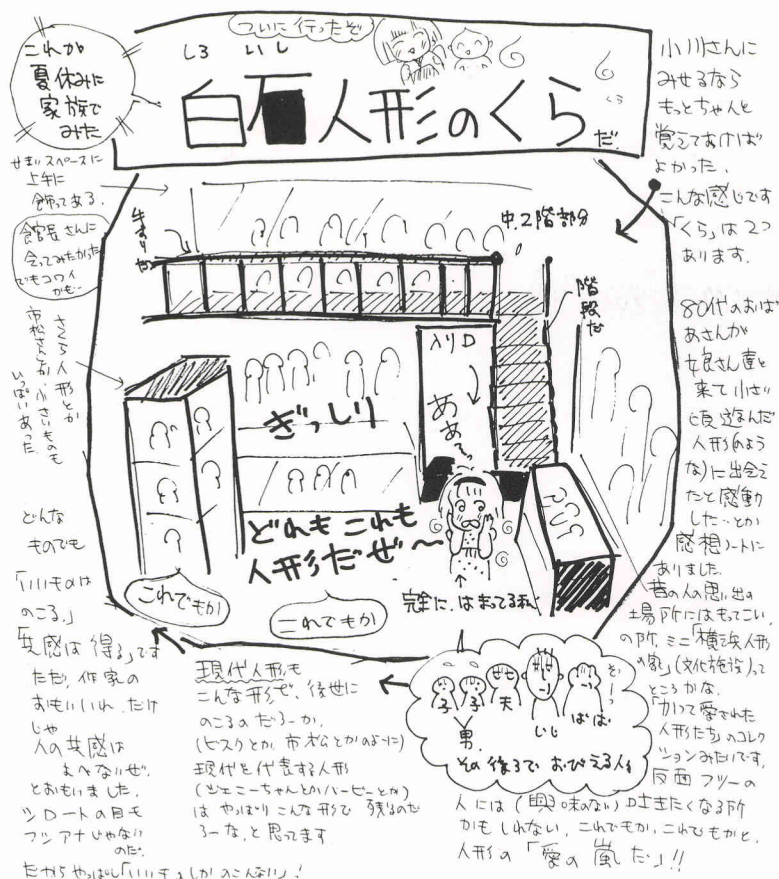
山野辺郁人形展
「セピア色の彼方から」
12月に仙台で開催



行けなくて残念！

会員の方から展覧会のご案内を頂きました。どうもありがとう。
拝見することが出来なくてごめんなさい！

.....



熊本県立美術館
熊本県熊本市二の丸2番
TEL 096-352-2111

今回も参加者のレベルが高く、二日間通して参加した方は、一体の人形が出来上がってしまいいそうな勢いでした。手の講習では、一人も失敗する人がなく、講師の黒川早恵美さんも驚いていました。サーニットも長所は、肌の質感に近く、やわらかいので焼く前ならいくらかでも表情が出せることだと思います。サーニットに対する会員の関心は高く、今回の講習会も早々に定員に達し、今回参加できなかった方のために改めて講習会の開催を考えたいと考えています。

(1)

にわたり特集した。表紙は三輪輝子さん。おそらく生存する日本人作家としては初の快挙ではないかと思われる。誌面の記事はD F J編集事務局長の小川千恵子が執筆した。このドール・リッター誌をご希望の方は、ユーラシア・ドールズの通信販売を通してご予約下さい。部数に限りがあります。



会場での山下治子さん

山下治子

2～3センチのねずみのミニアチュールでフランスで人気の高い山下さんは今年の干支にちなみ、1月6日から12日まで東京・銀座の和光で本邦2度目の展覧会を行った。表情豊かなねずみとそれを裏付ける驚異的な技術は見る人をひきつけて離さなかった。

2センチほどの作品をルーペで見れば、どれもそのまま大きくしても作品になるほど、動きや表情が豊か、愛くるしい。髪の毛ほどの太さのイギリス製の針を使い、専用の糸を使って制作されたぬいぐるみのねずみは、下着など見えない部分まで気が配られている。

今回の展覧会では70点あまりを展示、ドールハウスのように南フランスや日本の田舎といったステージを用意したが、作者によれば、それよりもこれらのねずみは日常の様々な場所にさりげなくおいてもらうのがいいという。ビスケットドールや人形に幅広く興味を持ち、制作もする。

南フランス在住。





「デージー・カッター」 人形は約10cm
ビスク製 関節は14カ所、乗っている木彫のロッキングホースも自身の作

ジェイン・デイヴィス (イギリス)

文 リスフェルド純子



ジェイン・デイヴィス

ジェーンのミニチュア人形を初めて見た時、それまでミニチュア人形について無知であった私は、彼女の人形のわずか2センチ位の顔にはっきり見られる豊かな表現力、創造性の高さと、10センチ前後の体全体をジョイントで動かすことのできるテクニックの確かさに感嘆した。限定作品でもう作らなくなってしまったという「ラスト・エンペラー」の幼い皇帝の表情は特に忘れられない。

最初からボーセレンの人形に興味を持っていたジェーンは、一九七七年頃からプロの人形作家として活動を始めた。宝石のデザインや修理を仕事としていたので、ミニチュアの人形を作るのに必要な技術は、その時身につけた。正式なアートの教育は受けていないが、アートに対する興味はずっと持っていて、水彩画やペン画もこなす。服飾デザインとその制作も12～3年仕事として、時にはセミナーで教えていたという。そのせいか彼女のミニチュア人形のコスチュームは素晴らしくセンスがいいし、その繊細さには驚嘆してしまう。

イギリス南部、サセックスに住み、住居と仕事部屋は昔の学校を

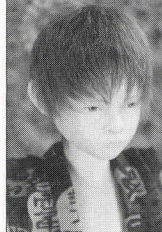
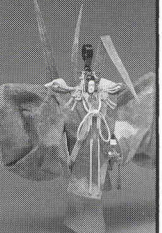
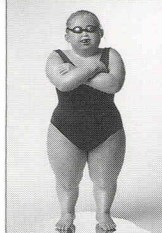
改造したもので、明るいインテリアで住み心地も仕事場としても満点である。彼女の良き伴侶であり、仕事のパートナー、アシスタント（事務）でもあるご主人のジョンとの間に男女二人の成人した子供がいる。軍人でもあったジョンの勤務の関係でタイなどアジア諸国にしばらく暮らしたこともあり、東洋文化に対する造詣も深い。

人を引っっぱっていくリーダーシップがあり、物事をてきぱきと処理していく才能に恵まれていて、彼女のまわりにはいつも人が集まってくる。「イギリス人形作家協会（BDA）」、「グローバル・ドール・ソサエティ」、「NIADA」と、それぞれの組織の中で重要なポストについている。

これからも今まで通りの現定数のミニチュア・サイズの人形は作り続けるが新しい試みである一体ものの作品である三十センチ大の作品も作っていききたい、と希望を話す。自分はラッキーな人間だと思う、と彼女は言う。人形を通して「人生」を学べるからだそうだ。

CLASSES

凡例 代：代表者 講：講師 内：内容（関：関節、固：固定ポーズ、伝：伝統技法、衣：衣装・洋：洋装、和：和装）
素：素材（桐：桐塑・桐粉、粘：石塑・紙粘土） 教：教室 日：講習日 入：入会金 月：月謝

アトリエ・リデル 166 東京都杉並区高円寺南4-2-3 若松荘101 03-3314-9794 代：山上真智子 講：山上真智子 Bee 内：関 素：粘 教：他1 日：水、他 入：10000 月：8000		岩切人形教室 158 東京都世田谷区上用賀5-27-20 03-3425-2396 代：田村涼子 講：横田早苗 田村涼子 内：固・関・衣（洋） 家具 素：粘・FRP 日：相談 入：15000 月：6500より		エコール・ド・シモン 四谷シモン人形教室 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-5-4 03-3402-9488 代：四谷シモン 講：四谷シモン 小沢茂・高塚宏 内：関 素：桐・粘 日：月火水木土 入：50000 月：14000より		竹取物語人形学校 171 東京都豊島区目白3-1-36 03-3954-3395 代：宮崎優人 講：宮崎優人・竹村和子 桑原静江・小林三千子 内：関・衣（洋・和）・抱き 人形・三ツ折れ・市松 素：布・桐・粘・胡粉 日：月火水木 入：20000 月：7750より	
ドール・スペース・ピグマリオン 158 東京都世田谷区奥沢6-28-14-201 03-3704-3730 代：吉田良一 講：吉田良一 福島弘太郎 内：固・関・衣 ・オブジェ・カラクリ等 素：布・木・桐・粘・FRP 日：月木金土日 入：20000 月：13000		西荻窪人形倶楽部 167 東京都杉並区西荻北3-13-11-102 03-3390-3523 代：福島弘太郎 講：福島弘太郎 内：固・関・衣（洋） 素：布・木・桐・粘 ビスク・FRP・張り コンポジション 日：金土日・他予約 入：20000より 月：12500 (2100/1時間)		藤井路以 173 東京都板橋区中丸町39-2-104 03-3530-6598 代：藤井路以 講：藤井路以 内：固・関・伝・衣（洋） マリオネット・からくり 素：粘 日：火・金 ・日（月1回） 入：20000 月：12000		やまと風人形教室 おとり 160 東京都新宿区三栄町25 ネオ寺島ビル2F 03-3355-1484 代：中西京子 講：各都市講師 内：固・衣（和） 素：和紙 教：全国各都市 講習日・月謝など 各教室による。 詳しくは上記東京 中央教室に問合せを	
よみうり渋谷アカデミー オブジェドール教室 150 東京都渋谷区桜丘13-15 03-5458-8844 代：高橋操 講：高橋操 内：固・衣（洋）・他 素：粘 日：第1・3水 入：5000 月：12000（3月分）		ART モマーユ 206 東京都多摩市貝取2-5-3-506 0423-76-1494 代：所由紀子 講：所由紀子 内：固・衣（洋） 素：布・粘 日：第1・2・3金 入：10000 月：8000		水澄美恵子人形教室 206 東京都多摩市貝取2-2-16-203 0423-38-8639 代：水澄美恵子 講：水澄美恵子 内：固・関・伝 衣装（和洋） からくり 素：布・桐・粘・FRP オープン粘土・張り 教：パルテノン多摩 /名古屋 日：木（月2回） 入：10000 月：10000		安藤早苗人形教室 194 東京都町田市森野1-37-1 0427-22-4030 代：安藤早苗 講：安藤早苗 内：固・関 素：粘 教：よみうり文化 センター町田/川越 日：第2・4火他 月：15000	
ノーマドール=スタジオ 242 神奈川県大和市西鶴岡8-4-29 0462-77-1332 代：荒木野馬 講：荒木野馬 内：固・関・衣（洋） 素：桐・粘 日：火日（各月2回） 入：20000 月：13000		さんがつうさぎ 三月兎工房 225 神奈川県横浜市青葉区美しが丘 4-1-1-202 045-972-2292 代：武井久美子 講：武井久美子 内：固・関・伝 素：桐・粘 日：木金土 入：10000 月：10000		滝康子創作人形教室 333 埼玉県川口市芝4178-29 048-268-7380 代：滝康子 講：滝康子 内：固・関・衣（洋） ・抱き人形 素：布・粘・張り ・胡粉 日：水 入：20000 月：12000		福田朝子人形教室 360 埼玉県熊谷市箱田2-11-12 0485-25-0959 代：福田朝子 講：福田朝子 内：固・衣（洋） 素：布・粘 日：第2・3月木 入：10000 月：10000	
太山レミ人形教室 730 広島県広島市中区十日市町2-7-24 コーポサンシャイン101 082-281-5069 代：太山レミ 講：太山レミ 内：固・関・衣（洋） 布張り 素：布・桐・粘 日：第1・2・4火土 月：5000		堀佳子 生き人形教室 719-01 岡山県浅口市金光町佐方148-4 0865-42-3634 代：堀佳子 講：堀佳子 内：固・関・衣（洋） 素：布・桐・粘 オープン粘土 日：第2・4火 入：10000 月：8000		大橋敏子人形教室 720 広島県福山市地吹町13-39-603 0849-31-5827 代：大橋敏子 講：大橋敏子 内：関・衣（洋） 素：粘・桐・ビスク 布張り 日：第1・4月 月：5000		教室案内は偶数号に掲載されます。掲載無料。 掲載をご希望の方は所定の書式がありますのでお申込下さい。	

□はじめまして。今まで人形に関する情報がほしくてもなかなか手に入らず、まわりには知っている人もおらず、フットを踏み入れた人形展で教えてもらった、まさに運命の出会い。教えて下さった作家さん（の人形もファンになりました）、その方はたがわまさきさんです。やはり活動が多いのは関東ですね。私は兵庫ですが関西でもたくさん発表の場、教室など増えてほしいものです。

私は今、二十才、子供も一人おり、なかなか人形作りにも手が出せません。十代のころはじめて作った人形があり、もっと理想の人形を作りたいと今もおもいつづけています。そこでDFJで関西にも人形教室の情報を提供していただきたいのです。望んでいる読者の方も多いはず！投稿のコーナーも充実してほしい。いろんな人のアイデアなどをききたいものです。

花崎千尋（兵庫県三木市）

□長い間、ずっと情報が欲しかったのです。地方で作るいらだちを感じ続けていました。四号の吉田先生、六号の四谷シモンさん（このお二人は地方で作っている者達にとっては神様のような方々です）の記事に目のウロコがポロリととれる思いがしました。どこまで心を入れるか、どこまでリアルに作るか・誰でも必ず乗り越えなければならぬ課題です。そのほかすみからすみまで栄養になることばかり。DFJの中身は濃いです。今、創作人形の世界は関節人形を中心とした非常にインパクトの強

いものと、「人形は優しく愛らしいもの」とする流れを汲むものに大きく分かれていると思います。が、小川さんにはどうぞいつの场合も冷静で中立の視点でお願いいたします。同じ世界に足を踏み入れている人達と時にはバアッと話し合えたらと思うときがあります。きつかけを作って下さった青山さんに感謝すると共に二月十一日に皆様にお会いできることをとても楽しみにしています。

木村宏美（岡山県岡山市）

■偶然ですが、関西以西の新しい会員の方から同じような趣旨の手紙を頂きました。こういう情報誌があつたらいいな、と私も思いましたし、作ってみたいと喜んで下さる方が多かったことが私の一番の喜びでもあります。DFJの会員には素晴らしい作家の方も大勢いらつしやいますし、情報をお持ちの方方もいます。できれば持てる知識をDFJの場で分け合つて頂ければどんなにいいかと思いたす。ご協力をよろしく願っています。関西の皆様には二月十一日にお会いできるのを楽しみにしています。

小川

*チヨットチャット

CHOTCHAT DFJ7号の編集後記でふれた、DFJ編集長の小川千恵子と気軽に人形談義をする幻のチヨット・チャットを、ちよつとやってみることにします。日時は三月、四月、五月の十日の一時半から二時までの間に集合を予定しています。場所は未定です。ご興味のあるかたは連絡して下さい。

編集後記

いつも綱渡りの編集作業だが、今回はハプニングの連続。中でも嬉しい驚きだったのが、映画女優のデミ・ムーアの来日である。彼女は現代ドールアートの情熱的なコレクターで、2年後にはアイダホに世界初の現代人形美術館の建設を予定している。その話はよく聞いていたが、なにせハリウッドのスター、天の星のような存在にしか思っていなかった。だが、ひょんなことからその美術館の館長となる人物と知り合い、彼にDFJを送り続けていたら、DFJの志向性は自分たちと同じだと、デミと二人でいつも見ていてくれたという。これだけでも感激なのに、今回の来日の事前に相談を受け、彼らと会うことまでできたのである。それどころかホテルの部屋に入ると、なんとそこには私が送り続けていたDFJと、三輪輝子さんの表紙のドールリーダーがきちんと置かれてある！これには本当に感激した。もちろん、私は何人かのコレクターのためだけに働くつもりはない。そうではなくて、「芸術的な人形はもっと多くの人に知られて社会的認識度を高めなければ」という彼らの主張が私の言い続けてきたそのものであり、確かに同じ山を目指す頼もしい仲間として身近に感じ分り合えたことがとても嬉しかったのである。決して大女優然とせず、気さくに自然に、そして熱心に、私と同行した作家と語り作品を批評していた姿は印象的だった。彼女が与勇輝館を訪れたことは既にフォーカスが報じたが、我がDFJは次号にて彼女の来日について伝えたい、ドール・フォーラム・ジャパン事務局長 小川千恵子

●投稿募集

LETTERS、REVIEW...採用分にはリーセはがきセットを進呈。

INFORMATION ニュースがあったらお知らせください。

近況報告 プロの作家の新作の発表の場です。採用分には規定稿料をお支払いいたします。

教室案内 DFJ偶数号に掲載いたします。写真は返却できません。

展覧会案内 随時受け付けます。早めにご連絡ください。写真は後からでも結構です。

●次号原稿締切 3月10日必着

写真の返却が必要なきには、「返却希望」と明記してください。

●DFJ購読方法

ドール・フォーラム・ジャパン（DFJ）は書店では販売されていません。販売は、会員購読制です。DFJは年に4回：2月、5月、8月、11月に発行されます。初年度会費は5千円、継続会費は4千5百円です。お申し込みは年会費を下記の方法でご送金ください。

◆郵便振替 00170 3 252796 「ドール・フォーラム・ジャパン」（通信欄にDFJと記入）

◆現金書留・または郵便小為替

●継続手続きはお早めに！

今号で会員期限の切れる方には郵便振替用紙を同封しています。継続会員の年会費は4500円です。翌号発行までにお申し込みのない場合は、無効となりますのでご注意ください。

●バックナンバー

5号（後藤朝子）、6号（四谷シモン）、7号（たがわまさき）
会員の方は1部1000円です。非会員の方：1400円

ドール・フォーラム・ジャパン第7号 1996年2月24日発行

編集発行 ドール・フォーラム・ジャパン事務局

〒189 東京都東村山市久米川町3-27-57 ☎ 0423-95-7547 FAX 0423-95-7975

編集責任者 小川千恵子

印刷 株式会社 日出島

ドール・フォーラム・ジャパンはユーラシア・ドールズのスポンサーシップにより運営されています。

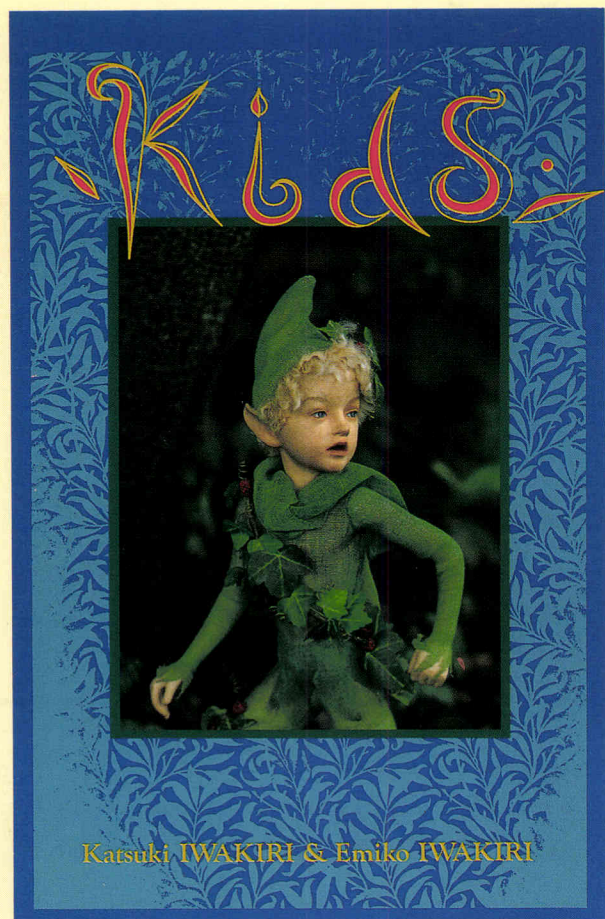
次号は5月24日発行予定

展覧会DM同封希望の方（個展DMは会員のみ）は5月15日必着

枚数はお問い合わせください

本誌掲載の記事・写真の無断掲載を禁じます

ドール・アート・ファン待望の2写真集



岩切克樹&映幹子作品集

kids

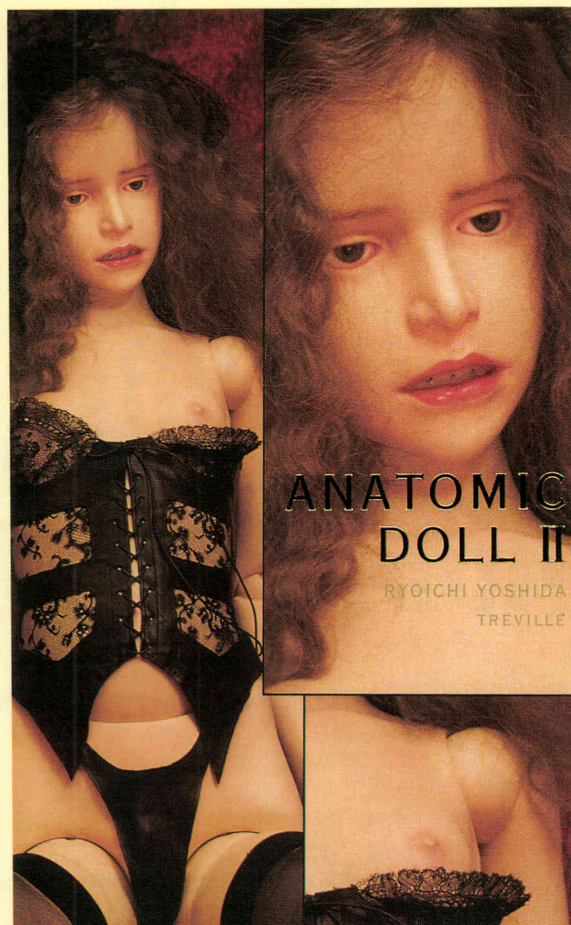
キッズ

A5判 全64頁(オールカラー)

¥1700(送料別)

発行 同文書院

岩切ファンが待ちこがれていた岩切夫妻初の写真集。
貴重な初期作品から最新作までを収録。



吉田良一 人形写真集

ANATOMIC DOLL II

アナトミック・ドールⅡ

A5判 全74頁(オールカラー)

¥1854(送料別)

発行 トレヴィル

好評の前作アナトミック・ドールに続く第2弾。前作以降の
3回の個展の内容を集約。

お求めにはユーラシア・ドールズの通信販売をご利用下さい

EURASIA DOLLS

ユーラシア・ドールズ 189 東京都東村山市久米川町3-27-57

tel 0423-95-7547 fax 0423-95-7975